

学生向け企画・ランチョンセミナー報告

産官学協力委員会 幹事 田 畑 彰 久

本セミナーは、第42回の名古屋大学での年会からスタートした今年で6年目となる企画であり、例年同様「水環境ビジネスガイダンス～水環境の仕事に携わりたい学生の皆さんへ～」をテーマに開催した。本稿では改めてこの企画の趣旨を説明した上で、今回の実施状況、学生に対するアンケート結果などについて報告する。

1. 企画の趣旨と経緯

将来の水環境を担うであろう日本水環境学会の学生会員は、水環境の仕事をごどのように思っているのだろうか、魅力ある職業であると考えているのだろうか、企業のどんなことを知りたいのだろうか、もし学生たちが就職活動をする際に十分に企業の仕事内容などについて情報を得ることができていないのであれば、そのような場を提供したい、このような想いからこの企画は誕生した。したがって、本セミナーは個別の企業の宣伝ではなく、学生が企業訪問を含む通常の就職活動では得ることの難しい貴重な情報（仕事の楽しさ、魅力、やりがいや苦労、学生時代に学んだ専門分野との関係など）を第一線で活躍している若手技術者から生の声で聞くチャンスを提供する場とすることに主眼を置いている。

2. セミナーの実施状況

昨年12月に学会団体会員に対して本セミナーへの参加企業を募集したところ、4社に本企画の趣旨にご賛同していただき、年度末の多忙な時期に若手技術者である発表者の派遣とランチ等のセミナー運営の費用についてご負担いただいた。改めてこの場を借りてこれら4社に対して厚くお礼を申しあげたい。

セミナーの開催案内は事前に学会のホームページ、学会誌の会告に掲載し、年会では、受付で学生参加者に講演集を配布する際にあわせて本企画のプログラムも配布することによって周知を行った。セミナーは、年会2日目（3月12日）の午前の発表時間終了後の12時20分から開始し、発表・質疑応答を含めポスターセッション開始時間の午後1時30分に一旦終了し、発表者の方々には午後2時まで個別に質疑応答に対応していただいた。また、水環境に関するビジネス領域の広がりを知っていただくために、希望者に水環境学会誌特集「水環境分野の仕事」(Vol.35, No.10, 2012)別刷を配布した。本企画は今年で6回目を数え、年会のイベントとして定着してきたこと、学会事務局および年会実行委員会のご尽力もあり、特段の勧誘をすることなく、定員100名のところに100名強が集まる盛況ぶりであった（写真1）。

各発表者とその発表概要については次の章で紹介する。

3. 各発表者およびその発表概要について

(1) 水ing株式会社 山川岳志氏

トップバッターとして登壇した山川氏は、水処理メー

カーを代表して、まず自社の会社概要を簡単に紹介した上で、水処理メーカーの主な事業領域や部門の全体像についてわかりやすく説明された。次に、上・下水道分野に関する水処理技術の開発に従事している山川氏の担当している現在の業務内容と1日の仕事の流れについて具体的に例示された。学生時代の専攻と業務の係わりについて、山川氏の場合はいづれも水処理に携わっていることから高い関連性があるが、一般的にはこれは稀なケースであると強調された。仕事のやりがいは、開発・納入する設備が社会の公共財となって、公益のために稼働すること、自分の手掛けた仕事有形となって後世に残ること、仕事の楽しさは、厳しい納期や課題をクリアして設備を納入し、顧客に感謝されたとき、直面した課題に対して自ら考えて取り組み、その結果が正しかったり、評価されたときであると説明された。

(2) 花王株式会社 田川直史氏

田川氏は、暮らしに身近な製品から工業用製品まで、幅広い製品を製造・販売しているメーカーの研究開発部門に所属する研究者としての立場から、自社製品を例に挙げ、いかに環境に配慮したモノづくりを行っているかについて説明された。田川氏の学生時代の専門は、有機化学・分析化学、微生物であり、これは現在の担当業務である新規原料・製品の安全性評価、環境適合素材の開発などと直接的な関連は少ないが、化学の知識と技術は、多視点から環境を考える上で役立っているとのことであった。仕事へのやりがいについては、製品の安全性と信頼を支える責任と担っていること、高い環境安全性を持つ製品・原料の開発の最前線に立っていることなどを挙げられたが、その反面、目標と意識を高く持たなければ、業務をこなすだけで毎日は過ぎてしまうと学生に対し大変貴重なアドバイスをいただいた。

(3) いであ株式会社 宮崎太一郎氏

宮崎氏は、社会基盤の形成と環境保全の総合コンサルタントとして、まず自社の事業の概要と主な担当業務について簡単に紹介された。宮崎氏の学生時代の研究テーマは、湖沼の水質挙動に関する研究や合流式下水道改善に関する研究であり、現在の担当業務である環境計画に



写真1 会場の風景

関する検討や環境影響、改善効果の評価・とりまとめなどにはあまり役立っていないが、研究をとおして培った物事を論理的に組み立てる思考プロセスは大いに活かされているとのことであった。仕事の楽しさは、報告書や会議資料、パンフレットなどで思いを形にし、それが発注者の満足を得て、よりよい環境・社会づくりにつながることであり、仕事の辛さは、繁忙期が年度末に集中することであると説明された。最後に、コンサルタントは専門性と分かりやすさの双方が求められ、変化への対応力、要領のよさ、泥臭さが必要であるとコンサルタントの心得をお話いただいた。

(4) セントラル科学株式会社 野木一哉氏

野木氏は、水質測定器の製造・販売などを手掛ける企業の営業マンの立場から、まず自社の事業概要を簡単に紹介された。その後、様々な水質測定器の紹介やその用途分野について概要を説明された上で、水道分野、飲料産業分野、環境分野、下水分野での水質測定について代表的な測定項目や用途について具体的に例示された。営業の仕事は、主に提案・販売、フォロー、サポートの3つであると説明され、学生時代に得た知識や経験、へこたれない精神は、顧客とのコミュニケーションや日々の営業活動の中で大いに役立っていると強調された。仕事へのやりがいとしては、要望や問題に対して、提案した製品やシステムが解決につながりお客様から感謝された瞬間、多種多様な分野での様々な現場（製造工程や処理施設）を見ることなどなどを挙げられた。最後に社内でもいつでも先頭を切る No.1 の営業マンを目指す目標を掲げられたのが強く印象に残った。

各発表からは、それぞれが仕事に対してやりがいと責任をもって日々業務に携わっている状況がひしひしと感じ取れ、学生たちもそれに呼応するように身近な先輩の生の声を将来の自分のイメージと重ね合わせながら熱心に聞き入っている様子が伺われた。

各氏約 10 分強の発表の後、質疑応答へと移った。最初の質問は「学生と社会人の最も大きな違いとは？」といった内容であった。各氏の回答は、「社会人は働いた対価として給与を得るので、限られた時間の中で最大限の成果を出すことを考えなくてはいけないこと」、「自分の興味のあることを調べるのではなく、何が顧客のニーズや環境のためになるのかを考えるようになったこと」、「常に周囲から会社の一員として見られるようになること」などであり、いづれの回答も学生にとっては貴重なアドバイスとなったであろう。全体での質疑応答が終わった後の個別質問（写真 2）では、常に数名の学生が次から次へと各発表者へ質問をし、予定の時間を超過するほど活発な意見交換が行われた。

4. アンケート結果について

セミナーに参加した学生の満足度と意見を把握し、今後の企画をより一層学生にとって有意義なものとするために、アンケート調査を実施した。参加者の約 9 割に該当する 89 名から回答があり、集計結果は以下のとおりである。

・参加した学生は、60%が大学院前期課程、30%が学部生であり、両者で全体の 90%を占めていた。また、

7%が大学院後期課程、3%が高専であった。

- ・参加の動機は 60%の学生が水環境関連の仕事に従事したい、あるいは興味があるからと回答しており、22%は就職活動の参考にしたかったとの回答であった。ちなみに、無料のランチだけを目標に参加した学生さんは極少数であった。
- ・将来の希望職種については、水環境関係のコンサルタントが 26%、水環境関係のプラントエンジニアリングが 17%、公務員が 13%、大学・公的機関の研究員が 12%、化学工業などの製造業が 10%、水環境関連の装置・分析機器製造業が 9%、同土木建設業が 7%、その他が 6%であった。
- ・企業の興味のある部門については、研究開発が 43%、技術・設計部門が 34%であり、この 2 つの部門で約 80%を占めており、総務企画部門および営業部門が約 7%、建設・工事部門が 3%であった。
- ・本セミナーそのものについて、学生の 89%が参考になった、11%が期待したほどでなかったと回答し、参考にならなかったと回答した学生はいなかった。

最後に参考になったこと、不満な点、その他自由に意見や要望などについて記入していただいた。これらの要望などについては、今後産官学協力委員会で改善策を検討していきたいと考える。

5. 総括

これまでの開催状況と本アンケート結果から、この企画は着実に学生会員に浸透し、彼らにとって年会の 1 つの有意義な催しとして好意的に受け止められていると考えられる。また、学生は通常の就職活動では必ずしも彼らが知りたいと思っている企業の十分な情報を得ているわけではないということを感じた。今後、少子高齢化が一層進む中、多くの産業で人材不足や技術・知識の次世代への継承が課題となっており、水環境関連の民間企業においても若い有能な人材の確保は大きな課題である。今回発表していただいたような若手の技術者が仕事に対してのやりがいや楽しさを伝えることによって次世代の水環境を担う学生諸君に少しでも水環境関連の仕事に興味を持ってもらえればこの企画は価値のあるものと評価できるであろう。今回の実施状況とアンケート結果を参考に、より学生にとって有意義な企画となるよう検討を行い、今後もこの企画を継続していく予定である。



写真 2 個別質問の様子